現代文學全集
日本
[37]
現代日本詩集
現代日本漢詩集

現代日本詩集
現代日本漢詩集

改造社版

杉浦非水裝幀

昭和四年四月十二日印刷
昭和四年四月十五日發行

現代日本文學全集 第三十七篇

著者代表 島崎藤村

編纂兼發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

株式會社秀英舍印刷

「現代日本詩・漢詩集」目次

現代日本詩集

序……一〇

外山丶山篇……一一
テニソン氏輕騎隊進擊の詩　高僧ウルゼーの詩

矢田部尚今篇……一三
グレー氏墳上感懷の詩　春夏秋冬

井上巽軒篇……一七
玉の緒の歌　比沼山の歌

湯淺半月篇……一九
天地初發　大極殿

山田美妙篇……二三
戰景大和魂　花の雲　つぼすみれ

小室屈山篇……二六
自由の歌　外交の歌

落合直文篇……二八
孝女白菊の歌　櫻井の訣別　吉野山

中西梅花篇……三七
靈魂　出放題　鴎外漁史　須磨の月夜

大和田建樹篇……四二
鐵道唱歌（東海道）妹のかげ

北村透谷篇……四七
楚囚之詩

國木田濁歩篇……五三
再會　嬉しき祈　別れ　「こゝの今」
山中　秋の月影　破壞　ゆめうつゝ
若鳥

佐佐木信綱篇……五六
凱旋　勇敢なる水兵　薩摩守　霜夜
浪はうち又浪はひく

正岡子規篇……五九
病の窓　蜻蛉

宮崎湖處子篇……六二
歸思　離別（二篇）葦　薄　水聲　忘れ
水　わが姉上　結びし柳　砧

田山花袋篇……六五
夕ぐれ　人づま　離れ小島　湖畔雜吟
山かげ　君が姿　春の夜　雨の夜

太田玉茗篇……六八
はなれ駒　宇之が舟

鹽井雨江篇……七〇
深山の美人

武島羽衣篇……七六
小夜ぎぬた　戀　常夏姫

大町桂月篇……八〇
琵琶瀧　涙の味　山の影

三木天遊篇……八二
武士の子　わたり鳥　故郷なる母へ
女心

繁野天來篇……八五
闇夜默坐　瓜盜人　蟬の聲　君が家

戸川殘花篇……八七
桂川（情死を弔ふ歌）

森鷗外篇……八九
でつくのひる　老船長　いもの苗　乃木將軍　扣鈕　影　問答のうた　火三越

島崎藤村篇……九三
草枕　潮音　明星　二つの聲（朝、暮）
初戀　おえふ　おきぬ　おさよ　おくめ　おつた　おきく　知るや君　雲のゆくへ　髪を洗へば　君がこゝろは
醉歌　葡萄栗鼠の木彫を見て　秋のう

た　秋風の歌　傘のうち　春やいづこ
に　鶯の歌　きりぎりす　晩春の別離
新潮　野路の梅　千曲川旅情の歌　常
盤樹　労働雑詠（朝、晝、暮）胸より
胸に（其一　めぐり逢ふ君やいくたび、
其二　あゝさなり君のごとくに、其三
思より思をたどり、其四　吾戀は河邊
に生ひて、其五　吾胸の底のこゝには、
其六　君こそは遠音に響く、其七　枝う
ちかはす梅と梅、其八　風よ靜かに彼
の岸へ）　椰子の實　寂寥

上田敏篇……二三
牧羊神　さかほがひ

與謝野寛篇……二六
藁の香（五十七首）
五月雨　お才　森　まくは瓜　海の
怪　車　戀しくば　樟の樹　行きあ
ひ　細緒　寢室　市役所　影　夏日
舞衣　人生　孤獨　友　他の友　床
あだびと　夢　呵責　乞食　異端
撥無　主人　磯　沈沒　噂　窓　猫
肥えたる女　犬　親爺　女　乘合舟
漫歩　兒　路上　黒き色　舞　虚空
ひと夜　砂丘　平凡　ひと日　愁
力　獅子つかひ　門　鵠　機　その
手に　春　砂ぼこり　黍

土井晚翠篇……二三五
星と花　暮鐘　星落秋風五丈原　萬里
長城の歌　おほいなる手のかげ　懐郷
日本の女性　ブルヂェ湖畔月夜の曲
永劫の戀　金華山より太平洋を望みて
釋迦牟尼とトルストイ　ガブリイレ・
ダヌンチオ　東方の聖經

高安月郊篇……一五三
落瓦賦

馬場孤蝶篇……一五七
ものの音　うきくさ

河井酔茗篇……一六〇
行く春の海邊に立ちて　塔影　落葉を
焚く歌　天の高市　こざくら　海酸漿
内裡雛　沈默　葉　霧降る宵　火の色
若き胸ふるき胸　こほろぎ　われは
一日　わが母　山の歡喜　海草の訪り
女の群衆　波のあと　鸚鵡　球根　雪
炎　雪もよひ

薄田泣菫篇……一七二
街頭　落穂拾ひ　蠹　臘腑臍竇　ああ
大和にしあらましかば　わがゆく海
金星草の歌　時のつぐのひ　くちづけ
大葉黄すみれ　はこやなぎ　小雀女
公孫樹下にたちて　おもかげ　もぐら
もち　つむじ風　禍の鷺脚　爐中の人
海のほとりにて　さざめ雪　夏の朝
海のおもひで　鴉の淨め　望郷の歌
石彫獅子の賦　郭公の賦　破甕の賦
村娘

山本露葉篇……一八八
流星　靜なる日の海　五月晴

小山内薫篇……一九〇
朝雲　君が憂　小野のわかれ　狂人の
歌へる秋の歌　亡弟

蒲原有明篇……一九三
歸港　滅の香　朝なり　顚割葉　有田皿
山にて　秋の歌　渴望　舍利　夏祭　わ
かきいのち　京の女　この時　水禽　祈
ほぎ　わが眼　光明讃　食卓　高速度の
世界　甕　靈の日の蝕　からたち　優曇
華　ともしび　草びら　ねたみ　冬三趣
横瀬夜雨篇……二〇五
富士を仰ぎて　人故妻を逐はれて　殯
宮　雪燈籠　お才　野に山ありき　や
れだいこ

伊良子清白篇……二一三
秋和の里　漂泊　月光日光　不開の間
安乘の稚兒　鬼の語　五月野　初陣
ねたか起きぬか

吉野臥城篇……二一九
埋火三律　人に答ふ　松林　立秋吟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宮城野に立ちて
岩野泡鳴篇……二三一
女護海島　ああ、世の歡樂　圓き石
常世の光　無言の石　月と猫　闇の盃
盤　胸のきしめき　眞赤な太陽　ダナ
エー獨白　瀬戸の火鉢　きりぎりす
眞下飛泉篇……二三九
戰友　出征
山崎紫紅篇……二三一
松の歌　始めて佐島を望み見て　木曾
殿
平木白星篇……二三四
日本國歌　機おり唄
野口米次郎篇……二三七
われ山上に立つ　月夜　歌の道　詩人
廣重に與ふ　某哲人に與へる　森の彼
方　ロバート・ブラウニングに與へる
蓮花崇拜　狂想　空しい歌の石　私は
太陽を崇拜する　影　禪僧　歸去來賦
影の一旅客　向日葵　雀　奇怪な雪
木の葉　藝術　朝顔　瀬戸内海　綱渡
り　幽靈　船頭　山上の一本松　沈默
の血潮
前田林外篇……二四七
黄金の扉　尼少女　夏の夜の夢　夢の
ほのほ　極樂鳥の賦　毒は金杯より
杜鵑に
兒玉花外篇……二五一
平民の屍　闇中田鼠に告ぐる歌　馬上
哀吟　松を刺して　可憐兒　傷める鷗
詩人塚　ラサールの死顔に
溝口白羊篇……二五五
駻馬鬼鹿毛
小牧暮潮篇……二五八
燭の火　白水郎の歌　拔錨　落ちる葉
相馬御風篇……二六〇
車のひびき　鐵路　夕　夜
與謝野晶子篇……二六二
草と人（十二章）
太陽出現　紅梅　春が來た　薔薇の
歌　蜂　お猿　市に住む木魂　フォ
ンテンブロオの森　夏の歌　颱風
君死にたまふことなかれ　繫縛
石川啄木篇……二六七
櫻のまぼろし　妹よ　辻　無題　無題
無題　幽思
北原白秋篇……二七二
邪宗門祕曲　接吻の時　濁江の空　謀
叛　顔の印象（A狂へる時、B酷の甕）
盲ひし沼　尋めゆくあゆみ　天草雅歌
（角を吹け、ほのかなる蠟の火に、艣
を拔けよ、鷄）　思ひ出序詩　斷章
時は逝く　螢　公園の薄暮　片戀　物
理學校裏　槍拵　新月　雨中小景　眞
珠抄　薔薇の木に　竹林の七賢　月光
微韻　雨中思慕　落葉松　野茨に鳩
この子あの子　竹林幽居　匂の秋　秋
立つ濱　白蛾　奉悼曲　白靡　白鷺
早春　泉石　渚　冬眠　螢に　言問
水上　老雞　汐首岬　緯太の山中にて
曇り日のオホーツク海　新曲千社札
平野萬里篇……二九四
やまおろし　硝子ふく家　轆轤のほと
り　うすあかり
茅野蕭々篇……二九七
熱鐵　落葉　回復期　モデルのうたへ
る歌　秋たつ朝　その頃　心の冬
澤村胡夷篇……三〇〇
壇の浦　棕梠の花　船室　砂洲にて
冬の窓　夕日の歌
長田秀雄篇……三〇三
深きところ　港の歌（鶯鶯）　乞食　暗
室　影（古沼）　月光紅娘曲
木下杢太郎篇……三〇六
はためき　高札　綠金暮春調　玻璃問
屋　金粉酒　兩國　該里酒　こほろぎ
海の入日　跋序　石竹花　跋序　浴室の窓よ
り落日を見る人の歌　よるよるは（よ

るよるは、河の遠見、やはり何より、消息、むかしの仲間、飛行機、女よ、硝子のひび）　夜ひそかに訪るる友　春の夜の大雪　草堂四季（昭和二年、昭和三年）

三木露風篇……三一四

春の旅情　現身　早春の林にて　流水の岸に立ちて　黎明　春の暮れ　白き月夜　濱　紅い太陽　橄欖の下　志摩の村　船の印象　海上の幻想　航海の船上にて　北海道の旅の或日　影と人生　黄金杯　春の微風　橋上　村童　渚の月　ロータス　法隆寺　月見草　横顔の印象　地上の春　散りし沈丁花　白日琴　夕の曲　牛　晩秋　秋の草木　宙の鳥　水底の月　善き言葉　自畫像　北洋の詩

野口雨情篇……三二八

旅の鳥　鳴の聲　河原柳　野雀、雀　畑のとんぼ　鐘になりたや　農民歌　あの山蔭　行々子　菜の花畑　紅殼とんぼ　豆の花　捨てた葱　眼子菜　枯れ山唄　橋の上　また來よつばめ　草刈り娘　洪水の跡

人見東明篇……三三三

心とこころ　林間のはてより　扉　心のほとり　白い花　ものなやみ　木の葉　旅の朝　君思はずや　鑪の香　海岸にて　何となく　眠れる冬

福田夕咲篇……三三六

寂々亭詩稿（四章）

畫帽『白雲居』　老娼婦おとく　木こりの唄　星はきら〳〵

正宮汪洋篇……三三八

少女の房毛　ローザ・ルクセンブルグ　孃を懐ふ

川路柳虹篇……三四〇

思想　歩む人　偶發事　動物園（鷄、燕、駱駝、山羊、野兎、孔雀、象、馬、綿羊、犬、狐、カンガルー、獅子、虎）　預言　雨の日

加藤介春篇……三四七

鴉　燕　暗い背　夜の白百合

服部嘉香篇……三五〇

浮ぶ芥（八篇）

盲魚　鳥　雑草　唐辛　涙　月（二曲）　風ひき車

水野葉舟篇……三五二

寒き夜なりし　祈る言葉を知らざれば　悲しき闇の中に

高村光太郎篇……三五四

雨にうたるるカテドラル　樹下の二人　鐵を愛す　雷獸　白熊　象の銀行　無口な船長　夜の二人　火星が出てゐる　花下仙人に遇ふ　あどけない話　ぼろぼろな駝鳥　同棲同類　何をまだ指してゐるのだ　觸知　街上比興　その詩　首の座

山村暮鳥篇……三三三

雲　おなじく　朝顔　おなじく　ある時　春の河　おなじく　おなじく　月　病牀にて　おなじく　西瓜の詩　ほそぼそと　朝　種子はさへづる　りんご　いつとしもなく　こども

森川葵村篇……三六六

睡蓮　雨のまぼろし　聲　六月のといき　異しき涙　雨の女　海鷗　わが祈り　月光と音樂　樂しき滅

三富朽葉篇……三八九

夜の鳥　花瓣と花粉　憂鬱病（I雨、II夜）　切抜畫

今井白楊篇……三七二

BLACK SWAN　燕の一群

福士幸次郎篇……三七四

昏睡　夜曲　泣けよ　ああ平原のかなたに　友情　幸福　獵師　發車前　智慧の實を食べてより　この殘酷は何處から來る　恢復　自分は太陽の子であ

る　扇を持つみなしごの娘　鍛冶屋の
ぼかんさん

竹友藻風篇……三八〇
わが心傷つき……　われ　冬の日　水
夫のうた　水葬　歳月　わかれ　母
雨　秋の落葉　想の廬　藥艸

生田春月篇……三八四
ロオザ・ルクセンブルク　春の讃歌
自由の歌　道化者の詩　時代の戀　勞
働爭議、家庭爭議　狼　雲　花うばら

富田碎花篇……三八八
映像　失はれたるAlphaとOméga
迎秋篇　溫い言葉に飢ゑてゐる群れ
幻の墓　夕の祈禱　五月の歌　鞍上に
映笑するもの　自主の峰　言葉　極北
の頁　胡地の夕　無爲の祭司

室生犀星篇……三九四
寂しき春　海濱獨唱　櫻と雲雀　土筆
かもめ　時無草　永日　罪業　はる
櫻咲くところ　朝の歌　夕の歌　未完
成の詩の一つ　自分の本道　街と家家
と遠方　永久に　小さい家庭　郊外の
春　若葉は燃える　詩歌の城　神神
王座　切なき思ひぞ知る　晴れ間　家
庭　何者ぞ　老乙女　埃の中　情熱の
射殺　人家の岸邊　友情的なる　己の
中に見ゆ

萩原朔太郎篇……四〇三
かなしい遠景　悲しい月夜　猫　あり
あけ　春夜　陽春　くさつた蛤　蛙
よ　海馬　蠅の唱歌　憂鬱なる花見
夢にみる空家の庭の祕密　恐ろしい山
艷めかしい墓場　綠色の笛　かなしい
囚人　憂鬱な風景　野鼠　厭やらし
い景物　閑雅な食慾　蒼ざめた馬　佛
陀或は「世界の謎」　ある風景の內殼から
猫の死骸

白鳥省吾篇……四一〇
大地の鐘　種蒔人　花屋のマダム　夜
の雨　古代の夢　町の鐘　洪水の約束
桃實る娘　種蒔く女

佐藤春夫篇……四一五
ためいき　淡月梨花の歌　秋刀魚の
歌　秋衣篇（二篇）　遠き花火　浴泉消
息（1大ぶん熱が出ました、2だんだ
んよくなります、3よほど快方に向ひ
ました）　故園晩秋の歌反歌　鳩

柳澤健篇……四二〇
雪の上　未來　喪失　微笑　虎　のす
たるぢあ　ほろびし戀　海水浴　和蘭
船　古代頌　野蠻　蘆屋風景　宇治淺
酌　月のメランコリア

西條八十篇……四二六
類唐　年　桐の花　梯子　蠟人形　鶯
海にて　顏の海　胸の上の孔雀　書物
指　かたりや　薔薇　なげきたまひそ
祕唱　母の唄　老人と帆　玩具の船
春の日　山の母

日夏耿之介篇……四三三
夜の誦　雪の上の聖母像　青面美童
生神母畫像の前（斷章）　しかし笛の音は
ない夜の事　灰の丘　薄暮の旅人　わ
が身の夜半　黑色　雙手は神の聖膝の
上に

堀口大學篇……四四〇
椰子の木　鴉　獅子宮　私は何も願は
ない　私　記憶の女　彼女の靴下　遠
い薔薇　流星　化粧　踊る女　星を匂
る　詩法　氣候　扇子　射的　虹　そ
の目　海の風景　要　鳩　太陽と蛇
私は歌ふ　うそ字　キャンディ　五厘
の笛

福田正夫篇……四四七
夏まつり　石工の歌　小さい戰士　大
空への思慕　月かゝりて空に　地と空
の交靈　落葉林　明るき虛無者　鷗
炎の花　錆びた嬰兒　地を翔けり行く
星々　光の銅鑼　陽だまり

千家元麿篇……四五二
車の音　わが兒は歩む　立ち話　眞夜中の宴會　雁　今宵我が家の　祕密　櫻

百田宗治篇……四五八
淺草　慰安　高天をめがけて　幼年時代　雪　かげ　何もない庭　歸り花　歸り花　受胎　味噌汁

佐藤惣之助篇……四六三
村村の最端　愿　潛水夫　月　喧嘩　星的生誕　西遊記の一節　南かぜ　南方哀詞　悔む

現代日本詩家年譜……四六八

現代日本漢詩集

序……四八〇

明治時代

副島蒼海詩……四八一
上レ暇不レ得作　贈二奥州佐藤平次郎一　觀二岳飛書一　題二朱文公幅一　別二徐明府一　楓橋　和二鐵兜山人南朝詩一　懷二伊藤春畝一　悼二金玉均一二首　梅花雜詠　寄二國分青厓一用二其華嚴瀑布歌原韻一

伊藤春畝詩……四八二
飲二某樓一　函館客樓作　北海道巡遊中作三首　醉題二馬關旗亭壁一　奉レ命赴二歐洲一船過二蘇西運河一　須磨禪昌寺看楓二首　自二清國一歸朝有レ作　奉レ命巡二視琉球一　南都懷古　京都作　二百三高地　金澤別業作　滄浪閑偶成　十月廿五日發二奉天一赴二哈爾賓一汽車中作

小野湖山詩……四八四
寛永寺所見　天王寺所見　題二森春濤蓮塘詩後一　西山二首　華嚴瀑布歌

大沼枕山詩……四八四
十二宮詞倣二高青邱體一錄四　筑波山歌

森春濤詩……四八五
岐阜竹枝二首　送別二首　四月二日作　聞レ鵑　辛巳七月。將レ游二新潟一。賦レ此　留二別東京諸同好一　梅花四首用二趙甌北韻一錄二

岡本黃石詩……四八八
關原　鳴戸　新秋湖上　過二木蘭橋一有レ感。示二賴支峯一　石川丈山　讀二開國始末一。贈二島田鳥山一　八十自壽三首錄一

向山黃村詩……四八七
己巳元旦　赤壁圖　鄭所南墨蘭　秋山行旅圖　月下水仙二絕　金閣寺　飲馬長城窟行

長三洲詩……四八七
湖上秋晚　殘菊　日光祠　都府樓　天津城晚望　題レ畫　雨中送レ春

矢土錦山詩……四八八
白河　春畝公拉二余與二槐南一。更游二塔澤洗心樓一。席上次二槐南詩韻一錄一　鳴鶴先生將レ游二清國一　留別有レ詩。次韻送レ行四首　芳野懷古

末松青萍詩……四八九
西京　人丸祠望二淡路島一　欣欣女史騎レ馬來訪。有レ詩見レ似。戲次二其韻一　十月三日隨鷗吟社第十三次大會。追二次槐南湘南二家原唱韻一　星社大會後三日。戲東二社中諸子一。情見二乎辭一十四首錄四　歸鄉訪二舊師佛山先生一賦呈

巖谷一六詩……四九〇
雨中看二牡丹一　秋感絕句。次二丹羽花南韻一　醉中漫題　讀二蹠康傳言錄一　折レ梅寄レ人　春畝相公夏島別墅賦レ此奉呈　絕筆

森槐南詩……四九〇
夜過二鎭江一三首　送三青厓山人赴二朝方

第一軍幕二首　歸舟一百韻

本田種竹詩……四九二
岳陽樓道士胡松泉爲予供筆硯一　强二
求題壁一。率二成一絕一　九江客舍題壁
渡二青草湖一　三笠山　手向山　金華
山十首錄三　登嶽二十一首錄三

野口寧齋詩……四九四
送二槐南先生赴二廣島一　辛卯除夕。祭
詩龕雅集。次レ韻志レ感　寄二槐南先生
在二北京一　丁酉除日。得二湘南巴港書一。
賦此寄レ懷　送二海雪再二遊淸國一。次二
其留別韻一　送二松田學鶚赴二金州一　送三
宇田滄溟歸二土佐一。次二會寄レ懷詩韻一
寄三懷國分青厓在二瀟洲一

秋月天放詩……四九四
無隣庵　送二人上二函山一　石山寺　梅
天長節。高雄山觀レ楓二首　新宿禁苑
待二御宴一恭賦

橋本蓉塘詩……四九五
次二春翁論詩絕句韻一三首錄二　三李堂席
上同賦　題二梅花水僊圖一二首

大久保湘南詩……四九六
荻浦觀瀾亭卽事　馬入川　三條二州樓
阻レ雨謾拈三首　柳橋感レ舊　八百松樓
小集。同二小崎藍川佐藤六石一分二夢
香洲三字一爲レ韻。得レ洲

永坂石埭詩……四九六
丁字簾詩三首　笠置懷古　菅公像贊
芳山夜月圖　墨水觀花　戊戌五月八日。
雨中星岡雅集賦請二錦山　屈山　碧堂竹隱
諸君及列位吟正一

北條鴎所詩……四九七
種竹山人將遊二松島一　鎌倉一　明館偶
成　送三九峯遊二峽中一　山北驛站車中
謁二春畝侯爵一。率爾賦呈

木蘇岐山詩……四九八
自二七尾一抵　佐渡一舟中　望二越中劍嶽一
四月二十日觀二花於蓮乘寺一　和二人見
山詩一

森川竹磎詩……四九八
病中偶題　淸明　論詩二首　秋日詠懷
十首錄二

小室屈山詩……四九九
飛驒紀行二十絕錄六　芝山寓居秋晚漫
吟錄二　己亥秋日。薇城膝閣雅集。席上
賦レ此似二諸同人一

大正時代

國分青厓詩……五〇〇
山中歌　溪上辭　望二立山一　讀二十八
家詩鈔一四首　次二韵高島九峯長門峽歌一
三十二首錄三

岩溪雲川詩……五〇一
芳山　墨江　春帆樓　十八樓　長門峽
桃山陵

高野竹隱詩……五〇二
探梅三首　種竹山人書來。約レ同二游月
瀨一。率賦爲レ答二首　秋鵑和二服部擴風
韻一

落合東郭詩……五〇二
觀二李息齋墨竹一應制限韻　禁園看　梅
絕句　三角蒲軒屬題二航南印跡一二首節一
除夜寓直應制　葉山離宮卽事　有樹
篇

長尾雨山詩……五〇三
題畫四首　朝鮮　與二靑厓竹隱仙坡鐵石一
西山吟集分韻得二櫻字一　太白山人歌。
送三國分子美赴二臺灣總督招遊一

佐藤六石詩……五〇四
酬二國分靑厓見レ寄二首　奉二送桂公赴一
歐亞一　奉二輓春畝相公一二首

桂湖村詩……五〇五
送二田邊君碧堂游二禹域一十四首　鐘馗祠二
新田大作端午一

福井學園詩……五〇六
四月七日游二上野一　花氣　花落　望二
盤梯山一　被酒　飯二山白虎隊墓

土屋香國詩……五〇六
北越紀行絶句錄三　比翼塚　芳山懷古　二首
高島九峯詩……五〇七
日韓新協約成。賦呈二伊藤大使一　十月廿六日。電音報三春畝公薨二于吟爾賓一。賦二九絶一以器レ之三首　送三山縣大將奉レ使赴二露國一　京都　游峽絶句　鹿兒島
結城蕃堂詩……五〇八
赤壁　烏江廟　芳山懷古二首　哭二蒼海副島先生一　金陵懷古二首
石田東陵詩……五〇八
眼明　嘉木　梅花三首　淵源　藥苦　白蟻　反紫芝歌　仙臺
田邊碧堂詩……五〇九
奈良　送三牧放浪之二南京一　池亭觀レ雨　萬里長城二首　赴二臺灣一舟中二首　送三大倉聽松男之二南洋一二首　月夜踰二函根一吉野懷古三首　報下戴兵匪暴二清朝東陵一。竊中寶器上。慨然有二此作一　丁卯十一月到二北京一口占　青山春望
上夢香詩……五一〇
後樂園謁二夷齊廟一　拜二明治神宮一　川中島　富嶽　聞レ鵑
岡崎春石詩……五一一
送二人歸下山　夷齊採薇圖　桃源圖　詠レ石　贈二鄭蘇戡二首　醉臥二松下一
阪本蘋園詩……五一三
燕京　濟南　奉天　旅順　京城　平壤　臺北　新高山　臺南　高雄
久保天隨詩……五一三
續芳山懷古四首　耶馬谿二首　月瀨十律錄四
服部擴風詩……五一四
野間懷古　酒旗錄一　書事錄一　歲暮詠懷錄一
田邊松坡詩……五一四
登極大典恭紀二盛事一三章　華山樺山大將輓詞錄三
磯野秋渚詩……五一五
蘭亭會禊成五首　秋荷
井土靈山詩……五一五
寄二吳昌碩翁一三首　都下諸名流邀二飲顏清世君於精養軒一。予亦列。席上賦呈
上村賣劒詩……五一六
戊辰歲晚偶拈十二首錄三　哭二蒼海副島先生一二首
現代日本漢詩家小傳……五一七
明治大正詩史概觀……北原白秋……五一〇
明治大正漢詩史概觀……井土靈山……五八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代日本詩集

序

明治十五年七月、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三氏による『新體詩抄』の刊行は世に謂ふ新體詩の事實上の發生であつた。爾來六十餘年、日本歌謠を母體として新しく芽ぶいた「詩」は、かつて一國の藝文が數世紀に亙つて經過せる諸々の過程をこの短期間に實踐した。

而して誕生期の革新者の一人が、

「安ゾ知ラン……或ハ大家ノ出ルアリテ其新流義ナルヲ善トシテ一層ノ工夫ヲ加ヘ、更ニ人心ヲ感ゼシメ、鬼神ヲ泣カシムルノ詩ヲ賦シ出ス」云々。〔『新體詩抄』矢田部氏序〕

との未來への翹望はまことなりて、詩は旺んに興隆し「新體」の二字を脱却し、その獨特なる立場と役割とを燦然として認識せしめた。

より良き詩眼詩心を培ふためには詩の變遷、推移、發展の過程の味得するを要する。また如何なる時代の、如何なる詩人の、如何なる詩を愛するかの決定、この約束は詞華集によつて充される。

日本詩壇に於ては或時代または或流派の詞華集は尠しとせぬ。

『現代日本詩集』は、明治誕生期より大正に至る、詩史に輝ける詩人の詩業を、宗派的狹心を捨てて集成し、時代を序うて體系づけ、鳥瞰的全景を通覽せしむべき意圖のもとに編纂された。

從つて、一方、史的の事實を重んずると同時に、他方、現今の評價に堪へ得る佳品を採錄し、この二點の良き統一を求めた。

現存詩人にあつては、殆ど、その快心の作を各々の自選に俟つた。

『新體詩抄』より採錄されたる數篇の譯詩を見よ。屈山が「自由の歌」を、直文が「孝女白菊の歌」を見よ。或は建樹の「鐵道唱歌」を、飛泉の「戰友等々」を見よ。たとひ其處に幼稚、粗笨、蕪雜の難はあつても、是等の國民歌謠がいかに當代の時代感情のよき代辯者たるかを思へ。ただに詩のみならず、畢竟、凡ての觀照は時代を意識してのみ正しくあり得る。

各作家の人選は愼重に愼重なる考慮を費した。又、配列の順序はもとより年次的である。處女作の發表期、出世年代、活躍期を參酌し案配した。然しながらこれらの尺度的嚴密を期することは、到底求むべくして得らるるものでない。

尙ほ既刊本全集にその詩を發表せる森鷗外、北村透谷、國木田獨歩、石川啄木、北原白秋、佐藤春夫の諸氏の作はその重複を避けたるため、自然出づべくして出でなかつたものもある。次いで本全集に收錄さるべき上田敏、岩野泡鳴その他の諸氏に於ても同前である。

卷末添ふる處の北原白秋氏の「明治大正詩史概觀」は、氏が特に本集のために執筆せられたる勞作である。詩によつて語られたる詩史とも云ふべき本集に、尙ほ觀照の確實、考證の嚴密、しかも詩の如き詩史論を得たことの喜を喜びたい。

尙ほ著者八十五人の略傳は故人以外その自記を請うたが編輯の都合上添削案配した。

詩はその旺んなる興隆の結果、あまりにも顧慮なき進出を遂げ、今や散文化しつつある。「詩よ、何處へ行く」の聲が叫ばれつつある現在、過去詩壇の總決算書たり、無二の見本市たる『現代日本詩集』が、そのための良き道案内たらば幸である。

終に、本集の編纂に關し、川路柳虹その他の詩人諸氏、並びに齋藤昌三氏の寄せられたる好意を多とする。

昭和四年四月

外山丶山篇

テニソン氏輕騎隊進擊の詩　高僧ウルゼーの詩

テニソン氏
輕騎隊進擊の詩

其一

一里半なり一里半
並びて進む一里半
死地に乘り入る六百騎
將は掛れの令下す
士卒たる身の身を以て
譯を糺すは分ならず
答をなすも分ならず
これ命これに從ひて
死ぬるの外はあらざらむ
死地に乘り入る六百騎

其二

右を望めば大筒ぞ
前も左も又筒ぞ
共に打出す砲聲は
天に轟くいかづちの
響の如く凄まじや
彈丸雨飛の間にも
猛り立ちてぞ進むなる
死地にこそ入れ鰐の口
勇んで乘り入る六百騎

其三

拔けば玉ちるやいばをば
皆もろ共に振りあげて
きら〳〵〳〵と輝けり
敵陣近く乘り掛けて
大砲方をなで切りす

最と目冷しき働きぞ
烟の中に飛込みて
烈しく陣を破るなり
太刀の早業見ごとなり
敵の軍勢たじ〳〵と
遂にさゝふる事ならず
むら〳〵ばつとむらくづれ
馬の頭ぞ立て直す
以前に進みし六百騎
殘るはいとゞわづかなり

其四

右を望めば大筒ぞ
左も後も又筒ぞ
共に打出す砲聲は
天に轟くいかづちぞ
彈丸雨飛の其中に

縱横むじん切り靡く
死地より出でて乘り歸す
鰐の口より脱れ出で
歸るは元の一里半
六百人の其中で
殘るはいとゞわづかなり

其五

あゝ勇ましきものゝふの
よに香しき其譽
手柄は永く傳へなむ
今のをさなご生立ち
とる年あまた重りて
腰は梓の弓となり
頭に霜を戴きて
孫ひこやしやご多き時
六百人の豪傑が
敵の陣へと乘り入れる
そのふる事を語りなば
末代までも名は朽ちじ

高僧ウルゼーの詩

おさらばさらばいざさらば
再び會はぬ暇乞ひ
榮譽に永く別るべし
人の習は皆都て
利運の端の芽出しなば
八重咲きにほふ花盛り
位に位重りて
榮燿榮華を極むれば
愚な胸に思ふ樣
運命强く願かなひ
天にも登る龍なりと
悦びいさむおろかさよ
冬やゝ深く置く霜の
情用捨も荒野原
根までを枯らす霜枯に
運極まりて身の墮落
見るも憐れな有樣は
我が今日の身の上ぞ
永の年月心なく
名譽の海に浮べるは
浮袋にてうか〳〵と
游ぐ童子に異ならず
丈の立たざる淵に入り
飽まで强き我が意地も
こらへおほせず張り裂けて
勞れはてたる精神に
忠を盡して年寄れる
其の甲斐もなく今ははや
身の零落に涙川
水屑とこそは成るべけれ
浮世の虛飾や譽れ程
忌むべき物はあらずかし
今に至りて我が胸に
初めて悟る所あり
廣き世界の其内で
王者の機嫌取り取りに
此世を渡る男ほど
憐むべきは無きぞかし
願ふ所は其笑顏
恐るゝ所は其不興
彼と是との氣がねして
憂さ恐怖さの數々は
軍するより尙ほ多し
女子の機嫌取るに增す
遂に零落する時は
天より落つるルシファなり
再び浮ぶ瀨はあらず

矢田部尚今篇

グレー氏墳上感懷の詩　春夏秋冬

グレー氏墳上感懷の詩

山々かすみいりあひの
鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸り行く
耕す人もうちつかれ
やうやく去りて余ひとり
たそがれ時に殘りけり

四方を望めば夕暮の
景色はいとど物寂し
唯この時に聞ゆるは
飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく
羊の鈴の鳴る響

猶其外に常春藤しげき
塔にやどれるふくろふの
近よる人をすかし見て
我巣に寇をなすものと
訴へむとや月に鳴く
いとあはれにも聲すなり

かしこには楡又こゝに
あらゝぎの木ぞ生茂る
其下かげにうづたかく
苔むす土の覆ひたる
壙に埋もれこの村の
古人長く打眠る

のきの燕もにはとりも
木魂に響く角笛も
あさぼらけにぞなりぬれば
かまびすしくはありつれど
冥土の人の眠をば
覺すことこそなかりけれ

死にたる人のはかなさよ
身を暖むる爐火も
妻のよなべも誰が爲めぞ
愛づるわらべがかたことに
爺の歸りをよろこびて
小膝にすがることもなし

曾てこの世に居し時は
麥も小麥も其鎌に

山もはたけも其くはに
手荒き馬も其むちに
繁れる森も其斧に
まかせて君が儘なりき

功名とても浮雲の
過ぐるが如きものなれば
この古人の世の益と
ほねをりするも不運をも
わびしき妻子の暮しをも
笑ふべきにはあらずかし

富貴門閥のみならず
みめうつくしきをとめごも
浮世の榮利多けれど
いつか無常の風ふかば
草葉の露もおろかなり
黄泉に入るの外ぞなき

苔にうもれし古人は
墓場の上に寺をたて
あたりまばゆき屋の内に
頌歌の聲に合すなる
樂器の音を聞かずとも

身の不德とな思ひそよ

ひつぎ肖像美を盡し
人の尊敬多くとも
ひとたび絶えし玉の緒を
つなぎとむべき術はなし
へつらふ人のほめ言も
長き眠は覺すまじ

考へみれば廢れたる
此古墳の古人も
世にすぐれたる量ありて
國を治むる德を具し
詩文の才も多けれど
あらはれずして失せける歟

學びの海は廣けれど
わたる船路を知らざれば
心の性は賢きも
身は賤しくて貧なれば
世のほまれをば聞かずして
空しく鄙に終りけり

深き水底求むれば

輝く珠も有るぞかし
高き峯をば尋ぬれば
かをる木草の多けれど
千代の八千代の昔より
人に知られで過ぎにけり

實に此墓に埋もれて
業はおとるもハムデンに
詩は拙くもミルトンに
國に軍を擧げずとも
クロムエルにも比ふべき
人のかばねやあるならむ

議院の議士を服さしめ
人のおどしも外に見る
國の安危を身に委ね
高き譽望を民に得る
此等のわざはおしなべて
古人何ぞあづからむ

惠みはひろく及ばねど
又常々のふるまひに
不德もいとゞ少しや
人を殺して王となり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com